Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

057

「そらす」という行為について
― 3歳児の姿から ―

永　田　陽　子
（日本女子大学付属豊明幼稚園）

1．はじめに

周囲の状況や相手の思いと関係なく自分の興味や関心がそのまま対象に向けての行為になりやすい3歳児は、そのためにトラブルを起こしたり葛藤を経験することが多い。保育者としては子どものそうした葛藤体験を大事にしながらも、子どもの主体的な興味や関心、あるいはそれを追求しようとする心情や態度を認めてあげたいと思う。また同時に周囲の状況や相手の思いに気づき、状況に応じた適切な行為がとれるようになって欲しいと願う。そのため、かかわり方としては子どもの思いに共感しながら、行為の修正を求めていくことになる。

しかし、久しぶりに三歳児を担任し一年間を過ごしてみて気づかされたことは、状況に応じた適切な行為がとれるようになるプロセスの中で、子ども自身が自分の興味や関心に直結した行為を中断するために、いったん興味や関心を別のところに向け、改めて興味や関心の対象に立ち向かう姿があることであった。つまり、自分の行為をコントロールするために、かなりのエネルギーを使って自分の興味や関心を目の前の対象・状況から「そらし」たうえで、改めて対象や状況に目を向け、行為を選択し直しているのである。こうした「そらし」の実態とそのことの意味を三歳児の具体的な姿を通して考察していきたい。

2．「そらし」の姿

事例1「あっ、猫だ！」

Hちゃんは砂場でなべに砂と水を入れ、スプーンでかきまわし皿に盛り付けたりしている。その横からAちゃんが砂場に入ろうとすると、Hちゃんは急に立ち上がり「だめ！」と強く言う。Aちゃんは「みんなの砂場だから入ってもいいんだよ」と言い返す。すると、Hちゃんは「ばか！」「嫌い！」と言ってAちゃんの手を叩き、ふたりは睨み合った。突然、Hちゃんは「あっ、猫だ！」とうれしそうに言い、Aちゃんの手をとって猫の方へ走って行った。しばらくしてふたりで戻って来るとHちゃんはまた先ほどの遊びを続け、Aちゃんも砂場に入り遊び始めた。

（考察）

入園当初から思い通りにならないと噛んだり叩いたりとトラブルが絶えないHちゃん。この日は落ちついて砂場で真剣に料理を作っていた。この集中している時間を大事にしたいが、こういう時ほど誰かに邪魔されるとかっとなって噛んだりすることがあるので、この場が壊されなければいいなと思い、私は近くにいる子どもにかかわりながら気にしていた。Hちゃんは「ばか！」「嫌い！」と言ってAちゃんを叩いたが、その後睨み合いから、猫の存在にAちゃんの共感を求めて、自分の行為を止めたのはいつもと違う姿であった。硬直化した場面の中で、Hちゃんは自分の砂場での遊びの方へこだわりから関心をそらそうとしていたと考えられる。そこで猫に自分の関心を一度向けた。その上で、またもとの遊びを、続けることが出来たのではないか。

事例2「名前、見ているんだ」

HちゃんはYちゃんの手をぎゅっと握り自分の行きたい方へ引っ張る。Yちゃんは目に涙をため、「嫌なの！放して！」と拒否しているが止めない。保育者が「Hちゃん、Yちゃん引っ張られるのが嫌みたいよ」と言うが、「だって！」と放そうとしない。しかし、しばらくするとゆっくりと片手ずつ放す。そしてまた引っ張ろうとするが今度はすぐに止めてYちゃんの名札に触り、「名前、見ているんだ」とめちゃくちゃに字を押さえながら名前を読んだ。その言い方が面白かったのか場がなごみ、Yちゃんの表情も和らいだ。近くにいたCちゃんも「わたしも読めるんだ」と加わり、名札読みごっこが始まった。

（考察）

HちゃんがYちゃんの手を引っ張り泣かせている場面は以前にもよくあった。ある時保育者はまだ園生活に不安を持っているYちゃんの気持ちを守ろうという思いで、なかなか放さないHちゃんの手を無理に放させた時、Hちゃんは「だって、Yちゃんのこと好きなんだもの」と大泣きしたことがあった。その時保育者はHちゃんの訴えにはっとした。Hちゃんが親元から離れ、初めて人を好きになった気持ちをつぶしてはならないと思った。その気持ちをどう受け入れていった

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

らいいのか、またYちゃんの不安な思いをHちゃんにどう伝えていったらよいのか悩んだ。そしてHちゃんの行動を止めることは少し控えようと思っていたので、この時は保育者の方にも少し余裕があって経緯を見守ることだ出来た。もし以前のようにHちゃんの行動を即座に止めていたのならこのような展開はみられなかっただろう。Hちゃんとしては（Yちゃんは引っ張られるの嫌なんだ）とはわかっていても、自分の好きだという思いに直結した行動を止めることは難しかったようだ。しかし、Hちゃんは目の前にある名札へと関心をそらしたことで引っ張るという行動をコントロール出来たのではないか。

事例3「怪獣がきたのよ」

みんながお弁当の用意を始めても自分の棚のところにじっとたっているUちゃん。保育者が「お弁当の用意しようか？」と声をかけると、急に立ち上がり「怪獣がきたのよ・・・」と誰にともなく言い、手を組み少し怒ったような表情をし、お弁当の用意をしている友達の間を歩き回る。保育者も一緒になり「怪獣はどこですか？」と探す動きをする。しばらくすると、自分からお弁当の用意を始め、その日は全部食べた。

（考察）

おやつでもお弁当でも幼稚園で食べることがスムーズにいかないUちゃん。そのことが気になっていたのだが、ある時入園してからお帰りの集まりの時以外座ることがなかったことに気づいた。まだ、園を自分の場所とは思えていないようなUちゃんの不安な気持ちを受けとめ、食べさせることよりも一緒に遊ぶことを心掛けていった。次第に座るようになりそれと共におやつも食べるようになった。しかし学期初めや調子が悪い時は、この事例のようにお弁当の用意が始まると動かなくなることがあった。このような時、保育者が強く出て用意させようとすると固ってしまって食べなくなることもあった。保育者としては食べたくないのなら無理に食べなくてもいいという思いと、でも食べた日はあんなに喜んで母親に報告しているのだからUちゃん自身本当は食べたいと思っているのかもしれないと考えると、何とかその思いにも添いたいと思っていた。

この日のUちゃんは自分で用意するきっかけがつかめなかったように思う。一度きっかけをはずしてしまうと、周囲に遅れてしまうことやもともと苦手な食事であることなどから、要求されている行為に向かいにくくなる。そうした受身な状態から脱するために、自分が怪獣になることで気分を変えようとしたのではないか。保育者は何で怪獣が出てきたのかわからなかったが、Uちゃんの動きににつきあった。そのことがUちゃんも思いが認められた形となり、主体的な動きの延長の中で、自分から支度に取り組むことにつながったのだろう。

3．まとめ

状況の中で不本意なことがあったり、分かっているけど素直に認められない時、その場や相手との関係の中にある緊張が生まれる。子どもはその過密化した空気を身体で感じ状況を変化させるために、あえて自分の興味や関心を別に向ける（そらす）ことで、自分のスタンスを改めその状況性を変化させたうえで、改めて興味や関心の対象に立ち向かっていくことがある。

しかし、保育をしていると、しっかりと自分の興味や関心に向き合って欲しいという思いが強く出てしまい、子どものそらす行為を見逃していたり、否定的にしか捉えていなかったように思う。そらす中で、その子どもにとっての状況や関係を作り直していることがあることに事例を通して気づいた。

もちろん、そらす行為の中には、相手の関心をそらして自分の思いを実現しようとするものもある。たとえば、友だちのおもちゃを取ってしまったA君。保育者が「今、B君がつかっているのよ」と言うと、おもしろいそぶりをしその場の笑いをとり、あいまいにしてしまうなどのようなものである。こうした「そらし」を従来は自分勝手なふるまい、自己中心性の表しとしてのみ捉えていた。しかし、ここであげた事例のように明らかに「そらした」後での対象への取り組みに変化がおきるものもあることに気づいた。こうした「そらし」の背景には、他児の関心についての理解や状況への認識が育っていることがうかがえる。園という集団生活の場ならではの経験ともいえよう。

それにしても、三歳児でも自分の行動をコントロールするために大変なエネルギーを使っていることに驚きを感じる。

今後の課題としては、そらし方には一人ひとりのその子らしさが表れているので、そこを丁寧にみていくことが個々の育ちを捉えていくことになる。また硬直化した状態から関心をそらすことで、その子が新たな行為の主体者になるということも意味があるだろう。それが共同体の育ちにも関係しているのではないかと考えられるので、その点を明らかにしたい。

NII-Electronic Library Service